

『愛する者を訓練する』(ヘブル人への手紙 12章 4-13節) 2022.1.9.

<はじめに> 私の父が10年ほど前に不意に転倒し、右膝半月板骨折で入院しました。帰宅に向けてのリハビリをする中で、父が笑いながら医師に言いました。「患者が金を払って、こんなに痛い目に遭わされるなんて、こっちがお金をもらいたいくらいだ」と。

I だれでも苦しい

①訓練のイメージ

僅か5-11節に9回「訓練」を記されています。軍隊などが連想されます。あるいは「しつけ」「懲らしめ」と訳せば、親子・主従関係が思い浮かびます。ある目的を果たすために能力を十分に発揮するために、普段からその能力を地道に鍛え、整え、伸ばす営みです。

②歓迎されない(11)

訓練に当てはまることは辛く苦しく、喜ばしいものではありません。避けたり、手抜きもできますが、そうすると効果も表れにくくなります。ですから、訓練を受ける者には覚悟が必要です。私たちを訓練に向かわせる動機付けには、どんなものが考えられますか。

③訓練の分野(1-4)

罪との戦いに抵抗し、勝ち切るための訓練です。過去の罪を主イエスの十字架によって赦された者に、罪はなおもまとわりつき(1)、反抗を仕掛け(3)、血を流させいのちを奪おうと襲い掛かります(4)。罪なき神の子イエスでさえ、この戦いを耐え忍ばれたのです(2-3)。

II 愛するが故に(5-10)

①神の子どもだから(5-8)

神は、主イエスを信じた者に神の子どもとされる特権(=本当の子⇔私生児(8))が与えられます(ヨハネ 1:12)。いのちと立場を与えた子を受用するが故に、父が家族に相応しくしつづけるのは当然です。「神はあなたがたを子として扱っておられるのです」(7)

②父と子(9-10)

子どもは未熟ですが、自分の弱さ・乏しさを認め、素直に指導を受ける謙虚さも持ち、指導者を尊敬して従います。肉親・世の指導者は自分の経験と価値観で訓練を与えますが、霊の父である神は私たちを愛し、その益の実現のために訓練します。

③誤解しないように(5-6)

私たちは「自分は分かっている」と言いがちですが、自分のことを冷静に見ていません。また、苦しみに遭うと神を疑い、のろい、神から背を向けて自分勝手にしようします。これがまとわりつく罪です。しかし神はなおも私たちを愛して、訓練して引き上げようとされます。

III やがて実を結ぶ(10-13)

①ご自分の聖さに(10)

私たちには自分をよく理解し、愛してくれる指導者が必要です。罪は神よりも自分を高ぶらせ、神よりも自分を優先します。今までこの原則で生きて来た私たちを、子として迎えた神は、神を信頼し、愛し従うよう訓練されます。ご自身にある聖い愛を持たせるためです。

②義という平安の実(11)

訓練の効果をすぐに求めると、失望します。「後になると」は訓練の先にある確実な将来です。神が語り掛けを聞き、それを愚直に信頼して、不安・恐れを抱く時にも忍耐し、神に従い続けると、神の善の中に居るという自覚と平安がその人を包みます。

③いざ訓練へ(12-13)

まず弱り衰えた箇所を見つけ、そこを神に従って動かすことから始めましょう。最初はうまく動かせず、可動範囲も限られているかもしれませんが、やがて改善します。また、躓きや転倒の元となるものを片付け、神とともに歩むにふさわしい環境を整えましょう。

<おわりに> 歯を食いしばってリハビリに励んだ父はやがて無事退院し、ほぼ以前と同じ生活に戻れました。治療費は払いましたが、願っていた実家での生活の日々を手に入れ、教会にも再び通えるようになりました。主はその訓練を受ける者に、必ず実を結ばせます。(H.M.)